

オモグサ、パロニヤがある。また岩場や深みに残存する個体群の食藻は岩場の近くに群落を形成するアオノリ類、カヤモノリ、カゴメノリ、シオミドロ類、サンゴモ類 *corajjia* などと思われる。

シラヒゲウニの夏期の食藻はホンダワラ類、ウミウチワ、ソデガラミ類等であると予想されるがひき続き調査したい。

ま と め

屋嘉田潟原海域の海藻類 49 種と顕花植物 6 種の種類をあげその中で比較的大きな群落を形成するリュウキュウスガモーベニアマモ群落、マツバウミジグサ群落の分布を調べた。

上記 2 つの顕花植物群落に付着するイトクズグサ、アオモグサ、カゴメノリの時期的消長とオキナワモズクとの関連性も示した。

シラヒゲウニが夏期には岩場の深みにいるが冬期には浅海域の藻場の上へ移動する群がいることを確認した。またシラヒゲウニの食藻についてもある程度把握した。すなわち冬期のシラヒゲウニの食藻はイトクズグサ、アオモグサ、カゴメノリ等である。

このように基礎的研究に得られた資料の集積は単に藻場自体の全貌を明るみに出すだけでなく、裾礁内・外域の広い範囲にわたりその役割を解明するのにかなり有効な手がかりを得られるものと思われる。

参 考 文 献

- (1) 岡村金太郎, 1956 : 日本海藻誌, 内田老鶴圃
- (2) 瀬川宗吉, 1964 : 原色日本海藻図鑑, 保育社
- (3) _____, 香村真徳, 1960 : 琉球列島海藻目録, 琉球大学普及業書
- (4) 千原光雄, 1971 : 珊瑚礁海域の海産植植物, ベントス研究会
- (5) MIKI, S. 1933~34 : On the Sea grasses in Japan (I~III)
- (6) 田中 剛, 野沢治治, 野沢ユリ子, 1962 : 南西諸島に産する Sea Grass について. 鹿大・南方産業科学研究報告 3 (2)
- (7) 布施慎一郎, 1964 : 藻場の生態, 科学の実験. Vol. 16. No. 1
- (8) 時岡隆 他, 1972 : 海の生態学, 築地書館
- (9) 岡田要 他, 1965 : 新日本動物図鑑, 北隆館

(6) シラヒゲウニ (*Tripneustes gratilla*) について

イ 生 息 域

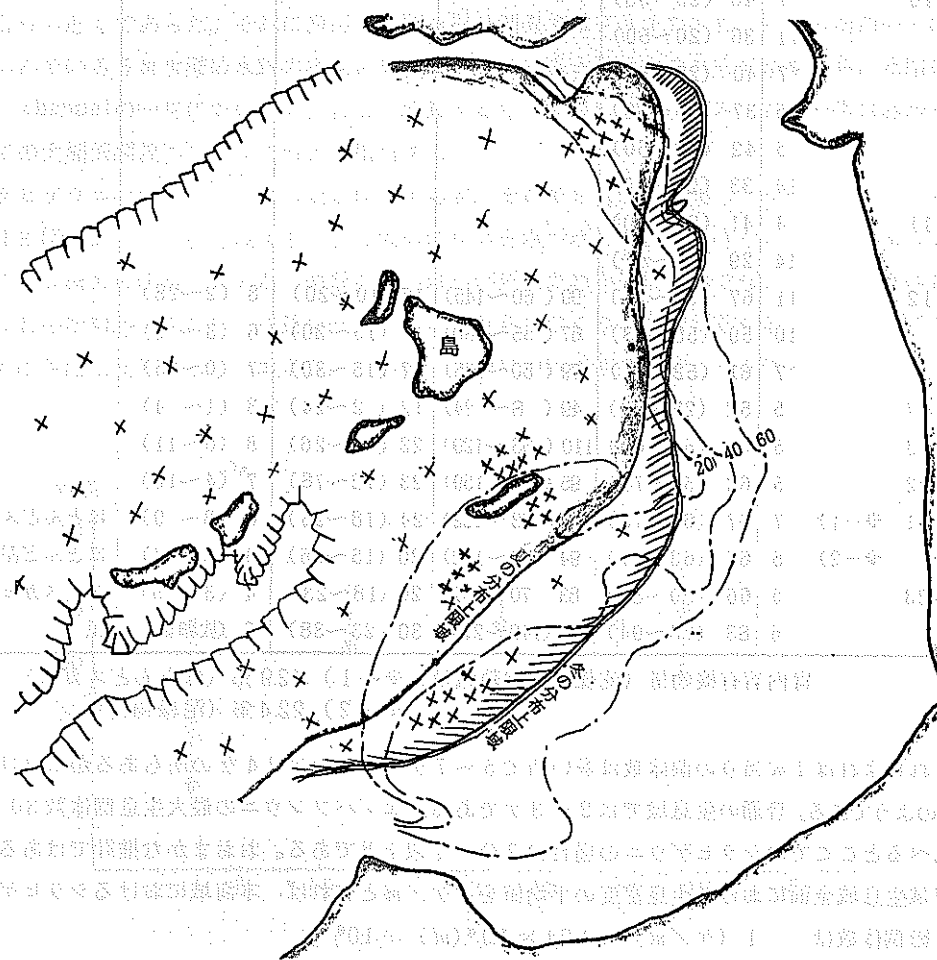
屋嘉田潟原におけるシラヒゲウニの生息域は第 12 図に示した。本海域においては、海浜に接続する砂泥底域を除いて、珊瑚礁原を含む残りの全域に分布している。すなわち潮干帯の +30 ~ 50 cm のレベルを分布の上限にして、それ以深に生息している。すでに述べたように、本裾礁内の海域は、おおまかに海兵部から沖合へ向って、砂泥底、スガモ帯、砂礫底とさらにサンゴ帯に分けられる。

シラヒゲウニはスガモ帯の沖合側半分を含む、その中側のほとんどの地帯にみられる。しかしサンゴ帯とその内側の干潟地帯を分けている boat channel に連なる水深 5 m の水路底にはほとんどシラヒゲウニはみられない。この深度はシラヒゲウニの生息下限のレベルに相当するものと推測される。

このことから本潟原では、シラヒゲウニの垂直分布は -5 m から +0.3 ~ +0.5 m の範囲とみることができると推測される。

おおばふんうに科に属するエゾバフンウニやバフンウニなどは潮干帯にはあまりみられないようである。例えばエゾバフンウニについては、成体ウニの生息水深は少なくとも干潮線以深である。また下限域は 10 m 以深とみられ水深 35 m まで分布していると言う。

らっぽうに科に属するシラヒゲウニは、エゾバフンウニやバフンウニに比べてかなり浅いところを生息域としていることが言える。このことは生息域における餌料藻の分布及び着生レベルと関係しているのかも知れない。(大瀬一小瀬) (大瀬一小瀬) (大瀬一小瀬)



第12図 シラヒゲウニの生息域